文化

今から70年前の1953年（昭和28年）、世界一周旅行中の中断をはさみ2年半以上に及ぶ雑誌連載を経て、三島由紀夫の長篇小説『禁色（きんじき）』が完結した。美貌の同性愛者で男子大学生の南悠一（ゆういち）が、女好きの老作家、檜俊輔（ひのきしゅんすけ）の指図を受けて、これまで俊輔を裏切った女性たちに復讐してゆくという奇抜なストーリーだが、それは同時に他に類を見ない社会小説でもあった。作者の三島は当時まだ28歳だったが、同性愛青年の独白体小説『仮面の告白』（49年）の成功によって、既に戦後を代表する作家の一人になっていた。

都電ゆかりの文学者 下

～三島 由紀夫～

白百合女子大学教授　井上隆史（いのうえたかし）

☼終戦後5年で復旧

空襲は都電に甚大な被害を与えたが、人々の生活に欠かせない乗り物であることから、急ピッチで修復された。終戦後5年で完全復旧し、その後も路線を拡張してゆく。

家を出て、「安手なバラックが乏しい灯りを洩らしている電車通りで電車を待った」悠一の前にも、「明るすぎる都電が街角のカーヴからよろめくような格好」で現れる。

座席は空いていず、坐れない十二三人の乗客は、窓辺にもたれたり吊革にぶら下ったりして散らばっていた。要するに程のよい混み方である。悠一は窓に凭ってほてる頬を夜風に向けた。（……）悠一の隣の窓には人がいなかった。次の停留所で乗ってきた二人の男がそこに凭りかかった。彼らは悠一の背中をしか見ない。何の気なしに悠一は後目に二人を窺った。

まもなく、その二人のうちの一人と悠一は、電車を乗り換える。

やがて都心へ出た電車は、退け時をすでにすぎたビルディングの窓明りのあいだを走った。人通りは少く、街路樹は暗い。公園の黒々と静まり返っている木叢（こむら）が見えだした。公園前の停留所である。悠一が先へ降りた。幸い降りる人が多かった。例の男は殿（しんがり）りである。悠一は電車通りをほかの乗客と一緒によぎって、公園と反対側にある角店の小さな書店へ入った。雑誌を拾い読みするふりをして、公園のほうを窺った。男は歩道に面した公園の便所の前でうろうろしていた。瞭らかに悠一を探していたのである。

巧みに男の尾行をかわした悠一は、公園で会った少年とホテルに行き、その後、赤電車（都電の終電のこと）で帰宅した。『禁色』は戦後、占領から独立にかけての時期の東京を舞台とするが、悠一がどこに住んでいて、何系統の都電に乗り、どの公園に向かったのか、曖昧にぼかされている。

しかし、丁寧に読んでゆくと、五反田発4系統の電車に白金猿町の停留場で乗り、魚籃坂下で目黒発の5系統に乗り換えて、日比谷公園で降りたようにみえる。

☼時代の推移暗示

悠一は美貌を生かして、かつて俊輔を裏切った女性を次々に魅了し、酒に酔わせて寝室に入ってから秘かに俊輔と入れ替わったり、別の女性の夫と同性愛する。そんな時、「坂を雪崩れおちてゆく都電の響」を耳にするのだった。

ところが、物語は思いがけない展開をみせる。女好きだったはずの老作家が、悠一を愛し始めたのだ。しかし、自分のような醜い老人を悠一が受け入れてしまうことを恐れる気持ちも俊輔にはあった。

彼の選んだ結論はこうである。ある夜、俊輔宅を訪れた悠一とチェスをし、勝負と勝負の間の短い休憩中に、1千万円の遺産を悠一に残して自ら命を絶ったのだ。現代でいえば、優に1億円を超えるだろう。

翌朝、立て込んできた弔問客や新聞記者を避けて、悠一は戸外に出る。

よく晴れた朝である。坂を下りると、都電の線路がさわやかに光った二条を、まだ人通りのすくない街の、迂回する街路のかなたへ延べている。店はまだ大方閉まっている。

一千万円、と若者は電車道りを横切りながら思った。よせやい、今自動車に轢かれたら型無しだぞ。

その後、悠一が省線（後の国鉄、現在のJR）の駅に向かって歩いてゆくところで小説は終わる。都電の最盛期は55年頃で、まもなく自動車、地下鉄にその役割を譲るのだが、『禁色』の幕切れはそんな時代の推移をも暗示している。

☼消える魔都の時空間

『禁色』完結の1年前にあたる52年、サンフランシスコ講和条約が発効し、太平洋戦争終戦後6年以上に及ぶ占領期が終わって、日本は独立国として再出発した。それとともに、新しい建物によって焼け跡が覆い隠されるように、占領下の東京の生態も覆い隠されてしまう。

こうして消えゆく魔都の時空間を、三島は小説世界の中に見事に封じ込めた。戦災からいち早く復興して都内を縦横無尽に走り、思いがけない場所と場所とを結ぶ都電の路線網が作中の随所に描きこまれていることが、それを象徴している。

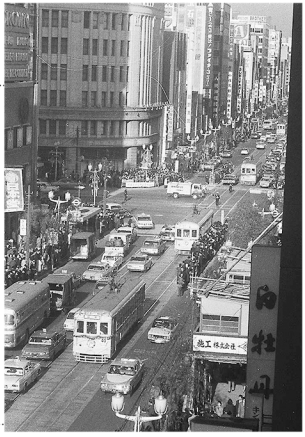
さらに、悠一が、俊輔の莫大な遺産によって呪縛され続けることになるエンディングは、国際社会における日本の位置を予告しているとも読める。なぜなら、独立を回復したはずの日本だが、実際には、東西冷戦構造のなかで米国の極東政策と無縁ではいられないからだ。『禁色』が他に類を見ない社会小説だというのは、このような意味においてである。

☼日本近代史の影刻む

今では都電は三ノ輪橋と早稲田の間を結ぶ荒川線のみが営業しており、村上春樹の『ノルウェイの森』（87年）では、「電車は家々の軒先すれすれのところを走っていた。ある家の物干しにはトマトの鉢植が十個もならび、その横で大きな黒猫がひなたぼっこをしていた」と描かれている。

「東京さくらトラム」の愛称で親しまれ、およそ12キロを1時間ほどで走る小路線である。

しかしその背景には明治以降の日本の近代史の影が深く刻み込まれているのである。



1967年（昭和42年）12月9日、都電銀座線最後の日に、銀座四丁目付近を行く電車